

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：34305

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26381246

研究課題名(和文)「各教科等の学習に機能する読解力」育成カリキュラム及び授業実践モデルの開発

研究課題名(英文) Development of reading comprehension curriculum and lesson practical model that function for learning of each subject

研究代表者

水戸部 修治 (MITOBE, SHUJI)

京都女子大学・発達教育学部・教授

研究者番号：80431633

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：全国的な調査の結果から、子供たちの読解力に課題があることが明らかになってい
る。指定された箇所を読み取ることができるが、様々な情報から目的に応じて必要な情報を見付けることなどが
できないことが指摘されている。この課題を解決するため、各教科の学習に機能する読解力を育成するカリキュ
ラムと実践モデルの開発を行った。
その結果、ベルリン市の取組を参考にしつつ、子供たちが今後の社会を生きるために必要な読解力を明らかにす
ること、その際、各教科等との連携を図ること、その能力を育成するための授業改善を進めること、などが重要
であることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：From the results of the nationwide survey, it is clear that there is a
problem in children's reading ability. Although it is possible to read the designated part, it is
pointed out that it is not possible to find the necessary information from various information
according to the purpose. In order to solve this problem, we developed a curriculum and a practical
model to train reading comprehension functioning in learning of each subject. As a result, while
referring to the efforts of Berlin City, to clarify the reading comprehension power necessary for
children to live in the future society, to collaborate with each subject, to nurture their abilities
It is clear that promoting lesson improvement for students, etc. is important.

研究分野：国語科教育学

キーワード：国語科教育 読解力 言語活動 読書活動 教育課程 授業改善 国際連携 学習指導要領

1. 研究開始当初の背景

OECD による 2003 年の PISA (生徒の学習到達度調査) の結果は、我が国の教育界に大きな波紋をもたらした。特に読解力は、OECD の平均程度まで低下した。2009 年の調査結果では再び 2000 年調査結果と有意差がない状況に回復してきたが、依然として次のような課題が見られる。(注 1)

- (1) トップレベルの国々と比べ、下位層が多い。
- (2) 必要な情報を見つけ出し取り出すことは得意だが、それらの関係性を理解して解釈したり、自らの知識や経験と結び付けたりすることがやや苦手である。
- (3) 「趣味で読書をするのではない」生徒の割合は、2000 年から減少 (44.2% → 55.0%) したものの、諸外国 (OECD 平均 37.4%) と比べると依然として多い。

この原因として、国語科の授業が、文章の詳細な読解に偏る傾向が極めて根強い(注 2)ことがあげられる。PISA の読解力は、与えられた文章を詳細に読み取るだけではなく効果的に社会に参加するための能力である。そのため、国語科の学習指導は国語科の枠内に閉じるのではなく、国語科以外の各教科等の学習を支える能力を育成するものとなる必要がある。こうした能力の育成には、国語科の小学校段階からの授業改善が不可欠である。

2. 研究の目的

本研究課題は前述のような現状を受け、我が国の小学校国語科の授業改善を図るため、各教科等の学習において機能する読解力を系統的に育むという新たな観点でカリキュラムを作成するとともに、これに基づいて授業改善を具体化する授業実践モデルを開発するものである。

3. 研究の方法

本研究課題の解決に向けて着目したのが、ベルリン・ブランデンブルグ州立学校・メディア研究所 (LISUM) を中心とした読解力向上に向けた最新の取組である。その概要は以下の通りである。

LISUM における読解力育成のためのカリキュラム (Lesecurriculum) の構築

読解力育成のためのカリキュラム (Lesecurriculum) を構築し、市内の基礎学校での授業改善に生かしている。このカリキュラムは、読解力を育成する場として、a. ドイツ語、b. ドイツ語以外の各教科、c. 授業外の学校の教育活動、d. 学校外の機関等との連携という 4 領域を設定し、互いに関連して読解力を育成できるようにしている。

ドイツ語科における、各教科等の学習に機能する読解力育成

上述の教育課程においてはドイツ語の授業の重要な視点として「各教科等の学習において機能する読解力の育成」を掲げている。例えば、説明的な文章を読む際の読解力とし

て、「テキストに対して質問を考えながら読む」「書かれた内容の具体例を考えるなどテキストを拡張して読む」といった読解力育成の手立てを構築している。(注 3)

学校全体で読解力を向上させるための国家的な取組 (Prolesen) の展開

ドイツ連邦全体で「学校全体での読解力向上」を図るプロジェクト「Prolesen」を展開し、各教科等の学習の基盤となる読解力育成を目指している。読解力育成の中核として、ドイツ語の授業改善モデルを開発し、それを各教科等の学習にも広げることで効果をあげている。

我が国の現状と比べたとき、これらの取組の特徴を整理すると、以下のことがあげられる。

読解力育成のカリキュラムという全体の枠組を明確にし、図書館等関係機関との連携を含んだ構想を明確にして取り組んでいること。

その中核に、ドイツ語の授業改善があり、そのための最も重要な視点として、「各教科等の学習において機能する読解力」の育成があること。

上述のような読解力を育成するための授業実践モデルを多彩に開発し、発信していること。

これらの点を生かし、我が国の小学校国語の授業に機能するカリキュラム及び授業実践モデルを提案するとともに、その効果的な普及方法も開発することが重要である。そこで以下の方法及び内容で研究を進めた。

ドイツ連邦における Prolesen の取組とベルリン市において現在も開発が進められている Lesecurriculum の特徴や運用状況の分析。

我が国の小学校国語科学習指導の面から見た児童の状況の把握と分析。

我が国の小学校教育に適合した「読解力育成のためのカリキュラム及び授業実践モデル」の開発。具体的には、国語科において、各教科等の学習に機能する読解力育成のための小学校国語科の授業実践モデル開発を行う。

4. 研究成果

(1) ベルリン市における読解力向上の取組

2014 年 9 月にベルリン・ブランデンブルグ州立学校・メディア研究所 (LISUM) を訪問し、読解力向上の取組の状況を把握した。その結果、以下の状況を把握することができた。

幼・小・中を見通した系統的な指導

子供の読解力を向上させるために、全市を挙げて系統的な指導を行っている。幼児期の段階では、日常生活の中で語彙を豊かにすること、小学校段階では、読むストラテジーを身に付けることや自ら本を選んで読むことで意欲を高めること、中等教育段階では、小学校段階に加えて各教科の学習において、自ら設定したテーマについて調べて説明する

などの学習を通して語彙を増やすことなどに重点を置いている。

新教育課程への移行

ベルリン市の学習指導要領は、2015年に改訂、2016年から全面実施となる。インクルージョンの発想から、学年段階ではなく、能力段階を前面に押し出したものとなる。

(2) 児童の読書に関する能力及び意識の実態の把握(注4)

国等が実施した調査を基に、児童の読解力等の実態を把握・分析した。

「小学校学習指導要領実施状況調査」の結果から(注5)

国立教育政策研究所が2015年に結果を公表した「小学校学習指導要領実施状況調査」は、小学校の学習指導要領の検証のため、学習指導要領の改善事項を中心に、各教科の目標や内容に照らした児童の学習の実現状況について調査研究を行い、次期指導要領改訂の検討のためのデータ等を得ることを目的として行われたものである。小学校国語においては、児童の読む能力に関し、次のような結果が得られた。

ア 目的に応じて読む能力の実態

第4学年において、目的や必要に応じて要約して読むことについて、物語の場面の移り変わりなど、内容を正確にとらえて読むことができるかどうかを問う設問[4B三(一)]の通過率と、同じ物語を目的に応じて要約して読み、あらすじをとらえる設問[4B三(二)]の通過率とを比較すると、次のようである。

[4B三(一)](内容を正確に把握できるかどうかを問う設問) ……通過率73.7%

[4B三(二)](目的や必要に応じて要約できるかどうかを問う設問) ……通過率44.5%

[4B三(一)]に比べて[4B三(二)]の通過率は、29.2ポイント低くなっており、同一の文章を読んで答える設問において、単に内容を正確に理解することのみならず、目的や必要に応じて要約するなどの思考や判断を伴う読む能力の実現状況について課題が見られる。このことについては、第6学年の調査問題についても同様の結果が見られた。このように、文学的な文章を読むことについては、単に内容を受動的に理解することにとどまらず、好きなところや心に響く叙述を紹介したり推薦したりするといった目的意識や必要感をもち、どのような言葉に着目するか、読んだ内容をどのように自分の言葉でまとめるかなど、課題の解決に向けて主体的に文章に働きかけ、思考・判断して読むことに課題が見られる。

イ 必要な箇所を特定して読む能力

必要な情報を得るために、どこをどのように読むのか、読んで得た情報をどのように用いるのかを考えて使いこなすといった、情報を検索したり活用したりする能力に課題が見られる。

第4学年では、目的に応じて文章中のどの

段落を読めばよいかを自ら判断することに課題が見られる([4A二(一)]58.9%)。「このことはどこに書かれているのか」といった、問われたことに対して情報を正しく取り出すことができるかどうかを見る[4A二(二)]の通過率78.2%に対して、どこを読むのかを目的に応じて判断することができるかどうかを見る[4A二(一)]の通過率は、19.3ポイント低い結果となっている。

情報活用能力調査結果から(注6)

情報活用能力調査は、児童生徒の情報活用能力について把握、分析するとともに、指導の改善、充実に資することを目的とした調査である。文部科学省が2013年10月から2014年1月にかけて小・中学生を対象にコンピュータを用いて実施した。この調査の結果では、次のような実態が明らかになっている。

小・中学生とともに、整理された情報を読み取ることができている。

小・中学生とともに、複数のウェブページから目的に応じて特定の情報を見つけ出し関連付けることに課題が見られる。

児童の読書に関する意識と調査問題の通過率

「小学校学習指導要領実施状況調査」では、児童の意識を把握するために質問紙調査を実施している。この質問紙調査とペーパーテスト調査のクロス集計の結果において、特に顕著な傾向が見られたのは、児童質問紙の「好きな物語やシリーズの本はありますか」という質問項目への回答とペーパーテスト調査の結果においてである。

児童質問紙調査項目2(10)「好きな物語やシリーズの本はありますか」とペーパーテスト調査[4B三(一)]「場面の移り変わりを正しく読み取ることができるか」を見る設問の通過率との関連を見ると、好きな物語やシリーズの本が「ある」、「少しある」と答えた児童の通過率は74.9%であり、「あまりない」、「ない」と答えた児童より高い傾向にある(12.4ポイントの差)。また、ペーパーテスト調査[4B三(二)]「目的に応じて、物語を適切に要約できるかどうか」を見る設問の通過率との関連を見ると、好きな物語やシリーズの本が「ある」、「少しある」と答えた児童の通過率は45.7%であり、「あまりない」、「ない」と答えた児童より通過率が高い傾向にある(12.8ポイントの差)など、複数の設問において同様の傾向が見られた。

さらに児童質問紙調査においては、各教科等の学習に対する意識を、「の学習が好きだ」という項目に対して、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」「わからない」から一つを選ぶ形で把握した。その結果、「そう思う」と答えた第6学年の児童が、国語科は他教科と比較して最も少ない割合にとどまっていた。

(3) 児童の実態を踏まえた授業づくり(注7)

児童の実態を基に、各教科等の学習に機能する読解力を育成する授業モデルとなる実践とその分析を行った。

調査結果等から見た、今後さらに育成が必要と考えられる資質・能力

これらの調査結果等に見られる児童の読書に関する実態を踏まえると、例えば次のような資質・能力の育成が一層重要になると考えられる。

【生きて働く知識・技能】

情報を検索する知識・技能

【未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力】

目的に応じて要約して読むなど、目的を明確にして読む能力

必要な情報を特定して読む能力

複数の情報を関連付けて、考えを形成する能力

【学びを生かそうとする、学びに向かう力・人間性】

本や文章に親しむ態度

様々な情報を自ら得たり、それらを活用したりしようとする態度

すなわち、与えられた情報を受け取るのみならず、必要な情報を検索して得るための知識・技能、そしてそれを活用し、目的に応じて情報を関連付けながら考えを形成するなどの思考力・判断力・表現力、更には本や文章に親しんだり、自ら情報を得て活用したりしようとする態度などが、児童の実態を踏まえて、一層育成すべきものとして浮かび上がってくる。

こうした資質・能力は、単に調査結果から見た課題であるばかりではない。今後、高度情報化やグローバル化が一層進展するであろう社会を生きる上で、目の前の子供たちにとって必要となる言葉に関する資質・能力の一例であるとも言えるだろう。

調査結果を踏まえた授業づくりの工夫点

～第6学年の「読むこと」の単元構想を例に前項のような資質・能力の育成を念頭に置き、第6学年の国語科の単元を構想する。具体的な指導のポイントとして次の点を工夫する。

児童自身の課題意識を喚起し、読む目的や必要性を明確化

自分がどのような情報を必要としているのかを自覚し、目次や索引、見出しを駆使して情報を検索

複数の情報を関係付けながら、自分の考えを形成

単元「『持続可能な社会』の実現について調べたことや考えたことを解説しよう」の構想と実践

ア 単元の指導目標

自分の思いを伝えたいという願いをもち、「持続可能な社会」の実現について調べたことや考えたことを解説するために、複数の資料を比べたり関係付けたりしながら情報を多面的に収集しようとする。

(国語への関心・意欲・態度)

自分の主張を展開する上で必要な情報を選ぶために、効果的な読み方を選択して複数の本や文章などを比べて読んだり、文章の内容を的確に押さえて自分の考えを明確にしながらかつ読んだりすることができる。

(読むことイ、ウ、カ)

文や文章にはいろいろな構成があり、書く目的に応じた構成がなされていることを理解することができる。

(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項イ(キ))

イ 言語活動とその特徴

本単元では、課題について情報収集し、解説文にまとめる言語活動を行う。児童は、エネルギー問題や再生可能エネルギー源の利用について書かれた文章を読んで、「持続可能な社会」の実現について調べたことや考えたことを解説文にまとめていく。

この言語活動を通して、必要な情報を収集し、それらに関係付けることで自分の考えを広げたり深めたりすることができる。そのため、単元でねらう「C読むこと」の指導事項「イ 目的に応じて、本や文章を比べて読むなど効果的な読み方を工夫すること」や「カ 目的に応じて、複数の本や文章などを選んで比べて読むこと」を実現するのにふさわしい言語活動である。

ウ 単元の指導計画(全12時間)

第一次(3時間)

新聞記事の紹介等を聞いたり、共通学習材を読んだりして、再生可能エネルギー等について資料を基に調べ、考えをまとめることに関心をもつ。

解説文の文例を読み、学習計画を立てる。

第二次(8時間)

エネルギー問題について自分なりの考えをもったり、解説文で「一番主張したいこと」を考えたりして、今後の情報収集の見通しを立てる。

自分の解説文に取り入れてみたい述べ方の工夫を見付けるために、共通学習材を参考にしながら読む。

説得力を高めるための論の進め方の工夫について、共通学習材を参考にしながら考え、「活用のポイント」として共有する。

「活用のポイント」を生かして、複数の資料を参照しながら、自分の解説文に必要な情報を選んでいく。

「活用のポイント」を生かして解説文を仕上げる。

第三次(1時間)

解説文を読み合い、成果を交流し、学習を振り返る。

エ 評価の実際

第7～9時間目(前項、単元の指導計画、第二次の箇所)は、「C読むこと」の指導事項イ、ウ及びカを重点的に指導した。本時の評価のうち、イに対応するものは次のとおりである。

[読イ]自分の主張に必要な情報を集めるために、比べ読み、速読、摘読、多読などの多様な読み方の中から効果的な読み方を選択して読んでいる。

ここでは、「自分の主張のもとになる事実を集める」「課題と解決策についての情報を探す」等、目的に応じた情報を検索するために、効果的な読み方を工夫することができていれば「おおむね満足できる」状況(B)と判断した。

児童の姿から

児童は、「現在の地球環境の危機的状況を解決する方法の一つは、再生可能エネルギーの普及。それを一人でも多くの人に伝え、『持続可能な社会』の実現を目指す。」という目的を常に意識して学習を進めていた。自分の主張に必要な情報は何か、読み手に納得してもらうにはどの情報をどう組み合わせで提示すると効果的かということについて試行錯誤していた。さらに、ペア・グループ学習の目的も明確化され、困っていることを解決しようと思いを合ったり、説得力を高めるための有効な情報を紹介し合ったりしていた。学びのゴールが明確になっていたからこそ意欲は高まり、それに伴って主体的な学びが生まれていた。

参考・引用文献

(注1)国立教育政策研究所、『生きるための知識と技能 OECD 生徒の学習到達度調査(PISA)2009年調査国際結果報告書4』、ぎょうせい、2010、pp.58-62、及び同研究所Webページ「学力向上に関する施策とPISA2009の結果」

(注2)甲斐睦朗、「新教育課程・国語科の基本的な考え方」『小学校新教育課程の解説国語』第一法規、1999、p16、

(注3)LISUM Lesen in den Naturwissenschaften、2011、pp.29-34

(注4)水戸部修治、読書人を育成する国語教育のあり方 - 児童の読書に関する実態を踏まえた授業づくり -、全国大学国語教育学会『国語科教育』第80集、2016、pp.12-16

(注5)国立教育政策研究所、「小学校学習指導要領実施状況調査教科別分析と改善点等国語」、2015、pp.3-4

(注6)文部科学省「情報活用能力調査の概要」、2015、p.6

(注7)国立教育政策研究所、小学校国語科映像指導資料「言語活動の充実を図った『読むこと』の授業づくり」事例11、2016

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

水戸部修治、言語活動ツールを活用した学習評価のポイント、査読なし、実践国語研究 347、2018、pp8-9

水戸部修治、育成を目指す資質・能力を

身に付ける言語活動、査読なし、教育科学国語教育 812、2017、pp.4-7

水戸部修治、読書人を育成する国語教育のあり方 - 児童の読書に関する実態を踏まえた授業づくり -、査読なし、全国大学国語教育学会『国語科教育』第80集、2016、pp.12-16

DOI:https://doi.org/10.20555/kokugok a.80.0_12

[学会発表](計1件)

シンポジウム「読書人を育てる国語教育のあり方」全国大学国語教育学会第130回新潟大会 2016、5

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

水戸部 修治 (MITOBE, Shuji)
京都女子大学・発達教育学部・教授
研究者番号：80431633

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()